

努力

中 三

「こんなお兄ちゃんでごめんな。」

二つ年上の兄から言われた。私の兄には軽度の知的障害がある。兄にその障害があると分かったのは、私が小学校五年生のときだった。中学校に入ってからすぐのテスト勉強をされていて、「あれ？」と感じたと母は言った。そして、夏休みにウイスクという検査を受けて、障害者手帳を受け取った。手帳は暗めの青色。中央に金色で「障害者手帳」と書かれていた。

「俺、障害があるから。どうして俺なのかな。支援学級に行くと思う、多分。」

複雑な表情をした兄の顔は今も脳裏に焼き付いている。

私は小さい頃から一生懸命努力している兄の姿をたくさん見てきた。学校の勉強はもちろん、逆上がりや習っていた空手、鼓笛のリコーダーなど、本当にたくさん練習をしていた。むしろ私よりもたくさん努力していたように思う。それなのに、

妹の私が解けるような簡単な計算ができなかったり、夜中まで泣きながら漢字練習をしていたりすることなんてしょっちゅうだった。できなくて怒られている兄の姿を見て、自分は怒られないようにしようといつも思っていた。

兄が小学校六年生のとき、下校途中にいじめられていた。私も学校からの帰りだったから、その一部始終をずっと見ていた。難しい計算問題を早口で言われて解けずに困っている兄を見てその子たちは、

「こんな簡単な問題も解けないなんて。」
と言つて、笑っていた。

私の兄は障害ゆえの特性なのか分からないが、とても優しくて穏やかな性格だ。だけど、そんな風に言われて悔しくないはずがない。兄は何も言わずにずっと黙っていた。その後、兄は家で泣きながら私に向かって、

「こんなお兄ちゃんでごめんな。」
と言った。

努力をすれば何でもできるよになると、小さい頃から思っていた。でも、努力をしてもできることには限りがあるということ、兄を見て知っ

た。それと同時に、努力する姿勢は決して無駄なことではないということも見せてくれた。高学年まで頑張つて通い続けてきた、昼休みの逆上がり教室の成果は出なかったが、運動が苦手なりに毎日諦めずに走り続ける努力をした兄は、マラソン大会で上位に入つて、とても嬉しそうだった。兄のこの努力の仕方はなかなかできることではないし、すぐに真似できることではない。自分にとつて、とても高いハードルでも諦めずに努力し続ける真つすぐな姿を見て、努力する姿はとても美しいものだと思つた。そして、人によつて物事の難易度は違うけれど、目標に向かつて努力している人に対して、異論や独自の偏見を押しつけることは、絶対にしてはいけないということも知つた。これは障害の有無に関係は無い。努力の仕方は人それぞれなのだから、私たち誰もができることは、「努力をすること」と「人の努力を応援すること」だ。

その後、兄をいじめた相手は、「俺が数学を教えてやるよ。」

と言つてくれたそうだ。兄はとても嬉しそうだった。できない数学をできるようにしようという兄

の努力を応援してくれた。私はとても嬉しい気持ちになつた。

「○○ができないなんて、障害者なの？」

というような言葉を中学生になり、よく聞くようになった。できないことをできるようにと、一生懸命努力をしている人に対し、そんな言葉を投げかけたなら、その言葉は刃物になる。「どうして俺にはできないんだろう」と傷付くことを言われるたびに兄も思つていたはずだ。努力する人を傷つけるようなことは絶対にしてはいけない。異論や偏見ではなく、「こうすればうまくいくと思うよ」「こうすればもっとよくなるんじゃないかな」とアドバイスをするように伝えることができれば、相手が心に傷を負うことはないだろう。

兄は私に、「こんなお兄ちゃんでごめんな」と言つたが、私は「こんなお兄ちゃん」を嫌いだと思つたことは一度もない。落ち込んでいる私を笑わせようと、兄なりに考えた面白い話をしてくれたり、テスト前に得意な歴史を教えてくれたりと、妹である私を懸命に支えてくれる「立派なお兄ちゃん」だ。今回、私の兄との実体験を通し、努力することと、人の努力を応援することは誰に

だってできることだし、それが、「権利」である
ということを知ることができた。これから生きて
いくうえで、自分自身で努力をしようという気持
ちをもち続けられるようになりたいと思った。そ
して、人の努力を応援し、その気持ちに寄り添う
ことのできる人間になりたいと思う。